

✠035 聖書の歴史

聖書の歴史はユダヤの聖典として始まりました。約 40 の執筆者(※1)によって約 1600 年もの間、延々と書き綴られて来た聖書は 66 書の収集書簡で、旧約聖書(39 書簡)は、およそ BC1500 から BC400 の間に記され、新約聖書(27 書簡)は AD40 から AD90 までの間に記されました。原文の旧約聖書は、アラム語を含んだヘブル語で書かれ、新約聖書は一般的にギリシア語で書かれています。ユダヤ人の聖書「タナハ」(Tanakh、ヘブライ語聖書)は配列が異なるだけで、キリスト教の旧約聖書と全く同じです(※2)。

ユダヤ人の歴史の記録は何世紀もの間、革の巻物や平板に書き記され、執筆者には、王、羊飼、預言者、そして他の指導者達の名が連なっています。最初の書は BC1400 の初期、モーセによって記され、その後 1000 年の月日をかけて、ユダヤ人によって他の書も記されました。BC450 頃、律法とユダヤの他の書は、ラーバイ(ユダヤ人の教師)たちによる審議会で選択され、権威ある神(エロヒム Elohim)の聖典が完成したのです。この期間、ヘブル聖典(Torah)は、預言(Nebiim)、書記(Ketubim)にまとめられ、それぞれの最初の頭文字の T と N と K を取り、「タナハ」(Tanakh)と呼ぶようになりました。

ユダヤ人写実者は、文字列と言葉とパラグラフ(文章の節または段落)をカウントする方法を用いて、聖典を正確に写本(※3)し、一つの間違いでも全巻を破棄しました。このようなユダヤ式写本方法は AD1400 年中期にグーテンベルクの印刷機が発明されるまで続きました。死海文書は 1000 年以上続いたユダヤの写本システムが驚くほど正確で信頼できることを物語っています。

イエスと過ごした、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、パウロ、ヤコブ、ペテロ、そしてユダによる書簡、福音書、手紙がまとめられたのが新約聖書(※3)です(AD40~AD90 頃)。AD200 頃、新しい契約の全巻はギリシア語からラテン語、コプト語(エジプト)とシリア語に訳され、“霊の言葉”としてローマ帝国はもとより広範囲に流布しました。AD397、当時発生し始めた分派と異端から新しい契約を守る為、“カノン”のカルタゴ会議(第三回教会会議)で、27 巻でまとめられた書簡が新約聖書となりました。

古今東西の文献の中で、聖書ほど古くから今日に至るまで多くの翻訳がなされてきたものはなく、2010 年末現在で福音書などの部分訳を含めれば 2,527 種語に翻訳されています。

1. タルグムーアラム語訳聖書

最初の翻訳は補囚後の早い時期に始まった。この時代パレスチナでアラム語が普及し、ユダヤ教の会堂においてヘブライ語聖書が朗読された後、それがアラム語に翻訳されるという行為が行われ始めた。タルグムとは翻訳という意味であるが、アラム語訳聖書を指すようになった。

2. セプトゥアギンタ(70 人訳聖書)

パレスチナから地中海沿岸世界に移住していったユダヤ人は、次第にヘブライ語を理解できなくなった。こうした事情からヘレニズム文化の中心地であったエジプトのアレクサンドリアに

において、ヘブライ語聖書のギリシア語訳が行われた。BC3 世紀中ごろ 72 人の翻訳者（イスラエル 12 部族から 6 人ずつ）によって 72 日間でトーラー（律法五書）の翻訳が完成したという逸話がある。これがセプトウアギンタ（70 人訳聖書）の由来である。新約聖書に引用されている旧約聖書の個所はこの 70 人訳からの引用であり、キリスト教が小アジア地方やマケドニア、ギリシアに進展して行ったのには、このギリシア語訳が大きく貢献した。

・ラテン語訳聖書（ウルガタ）

AD2、3 世紀にローマ支配下の地域にある教会ではラテン語が用いられていた。数種の不完全なラテン語訳が存在したが、AD382

頃、教皇ダマスス 1 世はヒエロニムスにこれらを改訂し新しいラテン語聖書を作ることを命じた。ヒエロニムスはヘブライ語、ギリシア語本文を翻訳し、405 年に完成させた。このラテン語聖書をウルガタと呼んでいる。1546 年トリエント公会議で、ローマ・カトリック教会の公認された権威ある聖書と決定された。

※ 1 : 執筆者

旧約聖書

- ① **モーセ** : 創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記 (BC1400) →モーセ五書、ユダヤ教においてはトーラー
- ② **ヨシュア** : ヨシュア記 (BC1350)、
- ③ **サムエル** (士師、民族指導者) : 士師記、ルツ記 (→元々『士師記』の一部、「ユダのベツレヘム」の表記は、「士師記」、「ルツ記」「サムエル上」のみ) (BC1000~900)
- ④ サムエル、**ナタン**、**ガド** : サムエル記上、下 (BC1000~900) →歴代誌上 29:29
- ⑤ **エレミヤ** : 列王記上、下 (→元々「サムエル記」の一部)、エレミヤ書 (→三大預言書=イザヤ、エレミヤ書、エゼキエル書)、哀歌 (BC600)
- ⑥ **エズラ** (捕囚からの解放後、エルサレムに派遣されたペルシアの総督もしくは宦官で、エルサレムの城壁を再建し、民族の復興に尽力したとされる人物) : 歴代誌上、下 (→「サムエル記」「列王記」と内容が重複)、エズラ記、ネヘミヤ記 (元々「エズラ記」と「ネヘミヤ記」は 1 つの書物) (BC450)
- ⑦ **モルデカイ** (バビロンから流刑後、エルサレムに帰還したエステルの従兄で、養育者) : エステル記 (→エステルは架空の人物であって、史実ではないという説もある) (BC400)
→聖書中、女性の名が書名として用いられているのは、「ルツ記」と「エステル記」のみである。
- ⑧ ヨブ記 (BC1400) : ユダヤ教の伝統ではモーセとされるが、実際の執筆者は不詳。
- ⑨ **ダビデ** (等) : 詩篇 (BC1000~400) →古代からの伝承ではその多くがダビデの作であるとされているが、近代は否定されている。
- ⑩ **ソロモン** : 箴言、コヘレトの言葉、雅歌 (BC900)
- ⑪ **イザヤ** (等) : イザヤ書 (BC 600) →三大預言書 (イザヤ、エレミヤ書、エゼキエル書)
- ⑫ **エゼキエル** : エゼキエル書 (BC550) →三大預言書 (イザヤ、エレミヤ書、エゼキエル書)
- ⑬ **ダニエル** : ダニエル書 (BC550)、⑭ **ホセア** : ホセア書 (BC750)、⑮ **ヨエル** : ヨエル書 (BC850)

- ⑯ **アモス** (テコア出身の牧夫) : アモス書 (BC750)、⑰ **オバテヤ** : オバデヤ書 (BC600)
⑱ ヨナ書 (BC700) : ヨナ? (執筆者不明)、⑲ **ミカ** : ミカ書 (BC700)、⑳ **ナホム** : ナホム書 (BC650)
㉑ **ハバクク** : ハバクク書 (BC600)、㉒ **ゼファニヤ** : ゼファニヤ書 (BC650)
㉓ **ハガイ** : ハガイ書 (BC520)、㉔ **ゼカリヤ** : ゼカリヤ書 (BC500)、㉕ **マラキ** : マラキ書 (BC430)

新約聖書

- ① **マタイ** による福音書 (AD55)、② **マルコ** による福音書 (AD50)、③ **ルカ** による福音書 (AD60)
④ **ヨハネ** による福音書 (AD90)、⑤ 使徒行伝 : ルカ (AD65)
⑥ **パウロ** : ローマの信徒への手紙、コリントの信徒への手紙一、コリントの信徒への手紙二、ガラテヤの信徒への手紙、フィリピの信徒への手紙、テサロニケの信徒への手紙一、フィレモンへの手紙 (AD50~70)
※「テサロニケの信徒への手紙二」、「コロサイの信徒への手紙」は、パウロの真正書簡であるかは議論がある。「エフェソの信徒への手紙」および「テモテへの手紙一」、「テモテへの手紙二」、「テトスへの手紙」は、パウロを擬して、パウロの死後書かれたとする見方が一般的である。
⑦ ヘブライ人への手紙 : 著者不詳 (近代までパウロによるものとされていたが、匿名の手紙であり、後代の筆者によるものとする見方が支持されている) → パウロ、ルカ、バルナバ、アポロ? (AD65)
⑧ **ヤコブ** の手紙 (AD45)、**ペテロ** I、II (AD60)、**ヨハネ** I~III (AD90)、**ユダ** の手紙 (AD60)、ヨハネの黙示録 (AD90)

※2 : 旧約聖書

旧約聖書はアラム語 (エズラ記 4:8~6:18、7:12~26、ダニエル書 2:4~7:28 等) を含んだヘブル語で書かれている。イスラエル民族はカナンの地 (パレスチナ) に定着後、ヘブライ語を使用した。後にアラム語が使われるようになった。このアラム語はアッシリア、バビロニア、ペルシアで用いられていた。エズラ記のアラム語部分はペルシア王との間で交わされた手紙であるが民衆は理解できなかったことを示す記録が列王記下 18:26 (ヒルキヤの子エルヤキムとシェブナとヨアは、ラブ・シャケに願った。「僕どもはアラム語が分かります。どうぞアラム語でお話してください。城壁の上にいる民が聞いているところで、わたしどもにユダの言葉で話さないでください。」) にある。アラム語は次第にイスラエルに浸透するが、バビロニア捕囚はそれに大きな役割を果たした。ギリシア支配以降ヘブライ語は聖書その他の宗教文書に用いられ、一般にはアラム語が日常化していった。イエス時代のパレスチナではアラム語が用いられていた。イエスの語られた言葉の「タリタ・クム」(マルコ 5:41)「エッフアタ」(同 7:34)「アッパ」(同 14:36)「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」(同 15:34)がアラム語である。

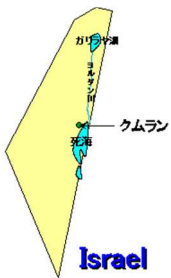
「旧約聖書」という呼び方はキリスト教において「新約聖書」と対応して名づけたもので、ユダヤ教においてはこれを「トーラー (律法)」「ネビーム (預言者 → 「預言書」という表記も見られるが、厳密ではないという意見もある。)」「ケスビーム (諸書)」と呼んでいる。この3区分は聖書の成立順序と関係している。「律法」は創世記から申命記までの5書で、ユダヤ人はこれをモーセが神から授かった律法の書として尊重し、最も早くおそらく BC5 世紀に編集された。これらは特定の著

者により書き下ろされたものではなく初期の多様な独立した記述が次第につなぎ合わされていくという長い過程を経て編集されていった。「預言者」はヨシュア記から列王記まで（ルツ記を除く）の「前（ぜん）預言者」とイザヤ書からマラキ書まで（哀歌、ダニエル書を除く）の「後（ご）預言者」に分かれる。

「諸書」は「律法」「預言者」以外の書物で、ある書物は早くからその価値が認められていたが、雅歌やエステル記などは聖書正典の中に入れるべきかどうか評価が定まらなかった。「諸書」を含めて聖書正典がユダヤ教団において決定されたのはAD1世紀の終わりである。ヘブライ語聖書に入れられなかった幾つかの書が「70人訳聖書」に収められたが、それはキリスト教会にも受け入れられ「旧約続編」となっている。

※3：写本

現存する聖書はすべて写本で、聖書の原本は存在していない。旧約聖書のヘブライ語写本で現存しているものはAD10世紀以前のものはない。断片的なものでは1世紀に属する儀式用に用いられたと思われる「十戒」と申命記6:4以下の古写本が19世紀末にカイロで発見されている。1947年に「死海写本」が発見されて、BC1世紀からAD1世紀に属するヘブライ語聖書写本を手にすることができた。最初の洞窟から発見されたものの中には完全なイザヤ書写本が含まれていた。今日までに11の洞窟からエステル記を除くすべての旧約聖書写本が発見された。これらの写本を作成した人々は、この洞窟群に近いクムラン台地に居を構えて、厳しい宗教的戒律生活をしてきたユダヤ教の一派の人々である。この発見によって一挙に1000年も前の写本にさかのぼることができたのである。



人々である。この発見によって一挙に1000年も前の写本にさかのぼることができたのである。

中世においては、「ソーフェリーム」と呼ばれる職業的な写本作成家と、「マソラ」と呼ばれる学者たちによって、聖書本文が正確に伝えられるよう努力がなされた。マソラ学派は母音記号を考案し、子音本文にこれを付して聖書の読みを確定した。8世紀後半から10世紀中ごろまで指導的役割を担ったのはベン・アシェル家の人々で、その写本の貴重なものは「カイロ写本」（895年）、「アレppo写本」（930年）、「レニングラード写本」（1008～1010年）の3つである。

ギリシア語写本は大文字写本 Uncial と小文字写本 Minuscule とに大別される。大文字写本はすべて大文字で語と語の切れ目が無く、文様のように美しいが、慣れないと読むのには困難である。小文字写本は草書体で語の区切りもあり読み易い。9世紀を境に、それ以前が大文字写本で、小文字写本はそれ以後に属する。そして3世紀ごろまではパピルスに書かれたものが多く、また巻物（Scroll）に代わって綴本（Codex）が多く見られるようになる。

・大文字写本で主たるものは、

1. アレクサンドリア写本：5世紀前半、アレクサンドリアで作成されたと推定されている。大英博物館所蔵。
2. ヴァチカン写本：4世紀、ヴァチカン図書館所蔵。
3. シナイ写本：4世紀、シナイ山麓の聖カテリナ修道院でティッシェンドルフが発見した。発見後ロシア皇帝に献じられペテルスブルク図書館に置かれていたが、ロシア革命後ソビエト政府が

らイギリスが買い取り、現在大英博物館所蔵。

写本に使用されたパピルス紙はエジプトにおいて BC3000 頃に考え出された。パピルスはその材質から湿度に弱く、また乾燥しすぎてももろくなる。それに対してはるかに強靱な材料は羊、やぎ、子牛の皮から作る皮紙（ヴェルム）であった。写本材料がパピルスから皮紙にとって代わったのは、この耐久性と共に材料がどこでも入手できるという利点にある。パピルスもヴェルムも最初は巻物として使用されていた。しかし巻物の場合、ある特定の部分を読みたい時には、そこを探すのに大変な苦勞をしなければならなかった。その不便を解消するために考え出されたのが、現在の書物のような綴じ本（Codex）である。聖書写本は特定の個所を何度も参照する必要が多かったので、このコーデックス型が早く普及したのである。



聖書を写すユダヤ人の専門家（ソーフェリーム）は、今でもヘブライ語の旧約聖書の言葉を、一字一字羊皮紙の巻物に書き写している。（写真提供／横山 匡）

※3：新約聖書

新約聖書はギリシア語で記された。このギリシア語はヘレニズム時代に地中海世界で共通語となったコイナー（※4）と呼ばれるギリシア語で、古典ギリシア語とは異なるものである。使徒たちによってキリスト教が伝えられていったのは、このコイナー・ギリシア語の世界だったので、新約聖書はコイナー・ギリシア語で記されたのである。ヘレニズム文化の中心はエジプトのアレクサンドリアであったが、この地で翻訳された旧約聖書のギリシア語訳はコイナー・ギリシア語であった。この聖書はセプトゥアギンタ（70人訳）と呼ばれている。新約聖書に引用されている旧約聖書はこのセプトゥアギンタによっている。

※4：コイナー

アレクサンドロス大王の帝国とその後継であるヘレニズム諸国で公用語として使用された古代ギリシア語。コイナーは「共通の」という意味で、古代ギリシア語のアッティカ方言およびイオニア方言を基盤としており、現代ギリシア語の基礎となった。